

保育者養成における「子ども学科特別行事」の運営を通じた リーダー学生の学びに関する考察

著者：近藤千草

所属：目白大学

英文タイトル：A Consideration of Leader Students' Learning Through the Management of Special Events in the Child Studies Department in Early Childhood Educator Training

英文著者名：Chigusa KONDO

英文所属：Mejiro University

要旨：

本稿は、本学科において20年間にわたり継続的に実施されてきた全学年の有志学生による「子ども学科特別行事」（第一部・第二部）を対象とし、2024年度に導入された新たな運営体制の概要を示すと共に、リーダーを務めた5名の学生へのヒアリング調査を通して、具体的な取り組み内容、得られた成果やその意義、さらに浮かび上がった課題を明らかにすることを目的とする。

リーダー学生へのヒアリングの結果、有志学生募集における魅力的な情報発信の工夫、組織図を活用した効果的な情報共有、子どもの視点に立った企画・運営、テーマを反映した世界観の表現、安全面に配慮した活動計画など、多角的な工夫がなされていたことが明らかとなった。これらの取り組みを通して、学生たちは学年を超えて協働し、学ぶことの楽しさを実感していた。また、学科行事を充実したものにするためには、活動全体の流れや目的を正確に理解し、状況に応じて柔軟に対応する力が重要であることにも気づいていた。さらに、こうした学生の主体的かつ意欲的な学びを支えるためには、教員による積極的な関与に加え、学生と共に活動する「同志的な在り方」が不可欠であることが示唆された。

キーワード：子ども学科特別行事 行事運営 リーダー学生 主体的な活動
保育者養成

1. 研究の背景と目的

「子ども学科特別行事」（以下、「学科行事」とする）は、本学科が短期大学として開設された2003年（2007年に大学へ移行）以来、21年間にわたり継続して実施されてきた取り組みである。本行事は、大学近隣の子どもたちを対象に、大学学園祭における遊び場の提供（第一部）と、創作劇の発表（第二部）を柱とする通年型の活動であり、現在では子ども学科ならではの特色ある取り組みとして、学内外において認知を得ている。学科行事の大きな特徴は、正規科目外の活動として位置づけられ、全学年の学生有志が主体となってチームを編成し、年間を通して創作活動に取り組む点にある。近年は、「第一部 子どものひろば」（学園祭における子どもの遊び場の提供）と、「第二部 まみむめめじろかきくけこども」（以下、「まみむめめじろ」とする）と称される12月開催の創作劇の二部構成で実施されており、両者は相互に連携しながら運営されている。

学科行事の運営は、全学年の学生を対象とした各部のリーダー募集から始まる。リーダーは、例年、3年生が務めることが多い。2024年度は、第一部の総リーダー1名、副リーダー1名、第二部の総リーダー1名、副リーダー1名、美術総リーダー1名の計5名体制で活動が行われた。なお、2024年度の両部に共通するテーマは「いきもの」であり、すべての生き物がそれぞれの個性を持ち、各自の持つ力を発揮しながら困難を乗り越えるという世界観を表現することを意図して設定された。

正規科目以外における学生の主体的な課外活動は、保育者として求められる技術力や構成力、協働性、観察力、判断力などの育成に寄与するとともに、保育への関心を深め、職業意識の醸成につながるものであることが、20年に及ぶ活動経験から実感として得られている。一方で、2020年以降の新型コロナウイルス感染症の影響による対面活動の制限、保育士資格および幼稚園教諭免許取得に伴う学修時間の確保、さらには放課後のアルバイト時間の増加など、複合的な要因により学生の参加意欲が低下し、参加者数の減少を招いているという課題も顕在化している。こうした状況を受け、学科行事の意義を改めて見直し、再構築する必要性が、担当教員間で共有されるようになった。

これまでの20年間にわたる活動の蓄積を踏まえ、今後は学生の主体的な学びの機会をより一層保障するとともに、限られた時間の中でも効率的かつ保育者養成としての深い学びへとつなげることを目指し、2024年度には次の3点を柱とした新たな実施体制を整えた。

- ① 学科行事担当教員（9名）を、学生と共に活動する「積極的なサポーター」として位置づける。
- ② リーダー学生が学業と行事活動を両立しやすくするため、教員も参加する定期的な「リーダー会」を実施する。
- ③ 活動を組織的かつ計画的に進めるため、情報共有を目的とした記録を残す。

このような実施体制のもと、2024年度の学科行事は2023年度末より開始された。学生主体の活動を基盤としながら、教員が積極的に関与するという新たな運営方法は、学科行事の質や学生の学びにどのような影響をもたらしたのだろうか。本稿では、2024年度の学科行事の全体像を概観した上で、リーダー学生5名へのヒアリング調査を通して、新たな運営体制の効果と意義、ならびにリーダー学生における学びの実態を明らかにすることを目的とする。さらに、これらの分析を通して、保育者養成における学生主体の活動の意義について示唆を得ることを目指す。

2. 研究方法

本研究では、2024年度に実施された学科行事（第一部・第二部）において、それぞれのリーダーを務めた学生5名を対象にヒアリング調査を行った。本調査は、新たな運営体制のもとでの活動実態を把握するとともに、行事への参加を通して学生が得た効果や意義、さらに活動の中で明らかになった課題を明確にすることを目的としている。

分析にはKJ法を用い、ヒアリングによって得られた語りを整理・分類することで、リーダー学生における学びの特徴を抽出することを試みた。ヒアリング内容は、事前に調査の趣旨を説明し、ボイスレコーダーによる録音について同意を得た上で記録した。その後、ボイスライトの手法を用いて逐語的に整理し、記録資料を作成した。ヒアリングでは、以下の9項目について質問を行った。

- ①担当教員の積極的な関与について
- ②定例リーダー会の実施とその効果について
- ③記録の活用とその重要性について
- ④組織図の活用と運営への影響について
- ⑤新たな発想や取り組みの導入について
- ⑥計画に基づいた活動の見通しと進行管理について
- ⑦授業の空き時間の有効活用について
- ⑧物品管理における工夫と徹底について
- ⑨主体的な活動を楽しむことの意義について

これらの観点を踏まえ、リーダー学生が活動を通してどのように学びを深めていったのかについて総合的に検討する。

3. 研究倫理

本研究は、目白大学研究倫理委員会の審査を受け、承認を得た上で実施した。なお、本研究の承認日は、2025年2月14日である。【承認番号24人-037】

4. 「子ども学科特別行事」の概略

本学科の特別行事は、第一部「子どものひろば」と第二部「まみむめめじろ」の二部構成で実施されている。第一部では、大学学園祭において子どもを対象とした遊び場を提供する出展団体として活動し、第二部では創作劇を制作・上演し、子どもに向けた舞台発表を行う。これら二つの取り組みは、学科行事として創設以来20年以上にわたり継続されてきた子ども学科の伝統的な活動である。両部ともに年間を通して活動が行われるため、前年度末には各部のリーダーを決定し、新年度の開始と同時に円滑に活動を開始できるよう準備を進めている。リーダー学生が最初に担う役割は、その年度のテーマ設定である。2024年度の共通テーマは「いきもの」とされ、制作物や演劇に多様な生き物を登場させることで、生き物それぞれの特性や魅力を伝える世界観の構築を目指した。

第一部「子どものひろば」は、大学学園祭の一出展団体として実施された。2024年度の出展団体は、有志によるゼミ・個人団体16団体(96名)と、授業による団体7団体(94名)で構成されていた。美術系のゼミ団体と授業団体は連携し、会場となる空間の壁面装飾や立体造形物の制作を担当した。一方、その他のゼミ団体は、それぞれに設定した「いきもの」をテーマとして、参加型遊具の制作や展示、物品販売などを行った。これら複数のゼミおよび授業団体の協働により、会場全体を「いきもの館」として構成した。

二日間にわたる来場者数は合計1,540名であり、そのうち子どもの来場者は636名であった。当日の「子どものひろば」の様子については、筆者が撮影した画像をもとに示す(画像1~8)。



画像1：会場入り口



画像2 立体(ねこ)



画像3(きりん)



画像 4: 壁面装飾(さる)



画像 5: 壁面装飾(ちょう)



画像 6: 壁面装飾(くらげ)



画像 7: 参加型遊具(ボールプール)



画像 8: 参加型遊具(輪投げ)

第二部「まみむめめじろ」の創作劇は、例年 12 月中旬の土曜日に本学内講堂で開催されている。2024 年度の演劇のタイトルは『ぼくたちのたからもの』であった。物語は、森に集まった 5 匹の動物（ぶた、ぞう、ねこ、ふくろう、りす）が一通の手紙を受け取る場面から始まる。その手紙には「宝を探し当てた者が森の王になる」と書かれており、5 匹は森の中へ宝探しに出かける。道中、さまざまな困難に直面するが、協力して乗り越え、ついに宝を発見する。しかし、5 匹はその過程で協力し合った経験こそが本当の“たからもの”であることに気づき、皆で森の王になることを決意する、というストーリーである。

劇の制作は役割ごとに班を分けて行われる。2024 年度は「部門」という考え方を導入し、より明確な役割分担と組織体制のもとで活動した。「クリエイティブ部門」は脚本班、背景班、大道具班、小道具班、館内装飾班、衣装・メイク班など、舞台制作に関わる班で構成され、「プロモーション部門」は広報活動を担当した。「パフォーマンス部門」は、役者班、表現班、音響・照明班、音楽班など、舞台上での表現を担う班で構成された。

各部門・班にはリーダーを配置し、チーム運営および連絡調整を担当させた。メンバーは全学年から有志を募り構成し、総リーダーおよび副リーダーが組織図を作成することで全体の運営体制を明確化し、情報共有の効率化を図りながら活動を進めた。さらに2024年度は、大学近隣の保育園・幼稚園の子どもたちが描いた「いきもの」の絵を展示する企画も実施し、地域との連携を深めた創作劇となった。

当日の発表の様子については、筆者が撮影した画像にて紹介する（画像9～14）。



画像 9:開演前の舞台



画像 10:準備風景（音楽班）



画像 11:子どもの絵画と創作遊具



画像 12:創作遊具



画像 13:上演風景①



画像 14:上演風景②

5. 2024年度における計画的な取り組み

近年、学科行事への参加者数が減少傾向にあることを受け、学科行事担当教員は、伝統的に受け継がれてきた行事の魅力や、学生自身が体験を通じて実感できる環境づくりを目指した。そのため、行事を計画的に遂行するための見通しを可視化し、学生

が参加しやすい環境の整備に努めた。また、学年間の垣根を越えた交流を促し、つながりの喜びを感じられる活動のあり方についても意識した。以下では、これらの目的の実現に向けて2024年度に取り組んだ具体的な内容を示す。

(1) 「子どものひろば」(第一部)における取り組み

①組織図の作成

組織図は、総リーダーおよび副リーダーによって作成された。「子どものひろば」には、科目団体、有志ゼミ団体、有志個人団体など、さまざまな立場の学生が参加しているため、全体の活動内容や進捗状況を把握することが重要である。この背景を踏まえ、総リーダーの役割は、①全体の取りまとめ、②情報発信、③リーダー会での情報共有、④教員との連携の4点と定めた。副リーダーは、①総リーダーのサポート、②各班との連携、③議事録作成を主な役割とした。

作成された組織図には、各班の名称とリーダー名を明記し、展示場所も一目で把握できるよう工夫した。また、各団体に対応する教員の名前も併記することで、連絡や相談がスムーズに行える体制を整えた(図1)。



図1 「子どものひろば」組織図

②企画趣旨の明確化

2024年度の企画テーマは「いきもの」である。私たちが生きる世界には多様な「いきもの」が存在し、それぞれに特徴的な性質や豊かな個性が備わっている。時には、大きさ・強さ・生命力の違いから、争いや支配、排除といった現象が起こることもあるが、いずれの「いきもの」も地上に必要な命として存在している。この考えを人間に置

き換えると、一人ひとりが異なる存在であり、外見や感性、ものの見方・考え方も多様であるといえよう。しかし、それぞれの違いを認め合い、個性を尊重し合うことで、人は互いに寄り添い、大きな力を生み出すことができる。その力は、世界をより豊かで温かいものへと変えていく可能性を秘めている。こうした企画趣旨を基盤に、「子どもひろば」では各出展ブースが「1つのいきもの」に焦点を当て、その生き物の世界観を表現した。いきものを通して人間の多様性や個性に目を向け、見方や考え方の違いを乗り越えた協力と共生の力を表現し、いきものの存在の素晴らしさを発信することをねらいとした。

各班は、関心のあるいきものを選び、立体模型や壁面装飾などの制作に取り組んだ。テーマの意図を共有することで、選定した生き物の魅力や特性を深く掘り下げながら制作を進めることができた。こうして生み出された作品は、来場者の心をいきものの世界へと引き込む力を持つものとなった。本企画の趣旨は「まみむめめじろ」においても同様とし、いきものの世界観を演劇で表現した。

③予算・物品の管理

「子どもひろば」は大学学園祭の一環として実施されるため、各班の制作活動には大学から配分される予算が使用される。活動の特性上、各班が独立して制作を行うだけでなく、会場全体を一体的な空間として構成することが目的である。そのため、予算も個別に配分するのではなく、団体全体で一括して計上し、必要に応じて物品を購入する方式が効率的であると判断した。この方針に基づき、リーダーが全体経費として予算を管理し、各班は必要な物品を借用書に記入の上（画像 15）、共通備品として使用する運用体制を整えた。また、複数班で構成されるため、各班の制作物を順次保管・管理する方法の整備も必要であった。

そこで、物品保管の専用スペースを確保し、班ごとにビニールテープで置き場を区分することで整理された保管体制を構築した（画像 16）。このように、予算の総合管理、物品の借用・返却体制、制作物の保管方法を確立したことで、学生たちは授業の空き時間を活用し、自主的かつ主体的に制作活動に取り組むことが可能となった。



画像 15: 借用書



画像 16: 物品保管の区分け

④子どもが楽しむ工夫

「子どものひろば」では、いきもの世界を表現するため、建物1階全体を活用し、来場した子どもたちが館内を巡ることで様々ないきものに出会い、その世界観を楽しめる展示を行った。一部の班では立体遊具を制作し、子どもが実際に乗って遊べる体験型コーナーも設置した。また、展示物に触れることができる作品も多く、見るだけでなく、手に取って感じる体感型の展示となった。

さらに、子どもが会場全体を楽しみながら巡れるよう、スタンプラリーを企画した(画像17、18)。受付で来場した子どもたちにスタンプ用紙を配布し、館内6か所に設置されたスタンプポイントには学生が配置され、子どもたちと直接関わりながら進行をサポートした。この参加型の工夫により、子どもたちは楽しく展示を体験でき、学生にとっても子どもとの関わりを通じた学びの機会が増えるなど、保育の学びとして意義のある取り組みとなった。



画像 17:スタンプラリー①



画像 18:スタンプラリー②

⑤アンケートの実施

一般来場者を対象に、Google フォームを用いたアンケート調査を実施し、本取り組みの検証を行った。2日間の開催で1,540名が来場したが、アンケートの提出数は37件(回答率2.4%)にとどまった。今後は回答率の向上を図り、より多くの意見を収集して保育に関する学びにつなげる必要がある。

「子どものひろば」の内容については、「大変良かった」が73%、「まあまあ良かった」が18.9%と、概ね高い評価を得た。感想の中には、「学生たちが力を合わせてひろばを作り上げたことがよく伝わった」「子どもたちが楽しめる盛りだくさんの内容でとても楽しかった。床に敷いてあった緩衝材のプチプチの感触や、さまざまなモニュメント、壁の飾りもユニークで飽きませんでした」といった、学生の努力や工夫を評価する声が寄せられた。

一方で、「学生が立っている姿勢や、学生同士で固まって場所を取っていた様子が

気になった」といった行事運営に関する指摘もあり、当事者意識を持ち責任ある行動をとることの重要性が課題として挙げられた。また、「何をする場所なのか分かりにくかった」「出口の方向が分からなかった」といった意見もあり、環境構成への配慮も今後の改善点として残された。

出展内容に関する希望としては、「乳児が遊べる内容」「体を動かせる遊び」「制作活動」「家庭でできる遊びのレクチャー」などが挙げられた。これらの意見から、年齢や発達段階に応じた内容構成や、家庭との連続性を意識した遊びの企画が求められていることが示唆された。

(2) 「まみむめめじろ」における取り組み

①組織図の作成

「まみむめめじろ」でも、リーダーによって組織図が作成された(図2)。「子どものひろば」と比較して多くの学生が関わるため、2024年度は「部」と「班」による段階的な編成を行い、より細分化された組織づくりを試みた。具体的には、以下の三部門で構成された。

クリエイティブ部門：脚本班、背景班、大道具班、小道具班、館内装飾班、
衣装・メイク班

プロモーション部門：広報班

パフォーマンス部門：役者班、表現班、音響・照明班、音楽班

特に大きな再編が行われたのは、パフォーマンス部門の「表現班」である。前年度までは「体育班」として、子ども向けのダンスや手遊び、流行のダンスを取り入れて演じていたが、現在の保育では、運動よりも“表現”としての身体の動きが重視されている。この観点から、従来の「体育」としての演出は演劇の物語構成にそぐわないと判断され、物語の流れの中で役者の心情や空間の雰囲気や身体表現で伝えることを目的とした「表現班」へ再編された。これにより、ストーリーにさらなる想像性と深みを加えた表現の実現を目指した。各部・班のリーダーは立候補により決定され、班員も有志で構成された。さらに、担当教員を組織図に併記することで、教員との連携体制を強化した。

脚本作成の進行に合わせて、各部・班のリーダー募集にも取り組み、それぞれの部門に対応したポスターを作成した（画像 20）。ポスターでは、「クリエイティブ」「プロモーション」「パフォーマンス」の各部門における具体的な活動内容を示すとともに、「背景作りで舞台に命を吹き込みましょう」「自分の手で舞台を作る楽しさを体験しましょう」「ファッションやメイクを楽しみながら役者の魅力を引き立てましょう」といった言葉を用い、学生一人ひとりの個性や得意分野が演劇全体に影響を与える存在であることを強調した。その結果、活動の楽しさが伝わり、学生の意欲を喚起する表現となり、「まみむめめじろ」に参加してみようとする動機づけにつながった。



画像 20:活動班の紹介ポスター

③ 「子どもの絵画展」の企画

「子どもの絵画展」は、大学近隣の保育園・幼稚園に通う子どもたちが描いた絵を大学内に展示する企画である。本企画は、過去に学園祭において実施された実績があるものの、近年は開催されていなかった。2024年度には、「まみむめめじろ」の会場入口で展示する案が担当教員より提案され、リーダー学生もその趣旨に賛同したことから実施に至った。本企画の目的は、学科行事の認知度向上を図るとともに、来場する子どもたちとの交流を通して、保育者を目指す学生の学びの質を高め、さらに大学の社会貢献につなげることである。

絵画展の対象園は、大学周辺地域（新宿区・中野区・豊島区）の保育園および幼稚園とした。絵のテーマは「好きないきもの」とし、子どもたちが自由に表現できる内容とした。今回は初めての試みであったため、園への依頼文は教員が作成し、計 21 園に郵送した。その結果、7 園から参加の許諾を得ることができた。参加が決定した園に対しては、広報班リーダーが画用紙および返信用のレターパックを同封し、郵送により対応した。

回収した絵画は色画用紙に貼付し、上部に2か所穴を開けて紐を通し、複数枚をつなげたガーランド状に加工したうえで、「まみむめめじろ」会場入口の窓ガラスに掲示した。掲示作業の際には、作品同士が重なったり、配置が不均一になったりする場面も見られたが、その過程を通して、学生は子どもが思いを込めて描いた作品を丁寧に扱うことの重要性に気づくことができた。また、郵送された絵画の園別管理が十分でなかったため、所属園の判別が困難になる場面も生じ、事務的な管理体制の必要性について学ぶ機会ともなった。

一般来場者を対象としたアンケート調査の結果からは、「個性」「華やかさ」「かわいらしさ」「アイディア」「地域とのつながり」など、概ね好意的な評価が得られた。一方で、会場内で来場者自身が“描ける”体験型の工夫を取り入れるとよいのではないかといった、今後の改善につながる意見も寄せられた。

④アンケートの実施

一般来場者を対象にアンケート調査を実施し、28名から回答を得た。演劇の内容や上演時間については、「子どもが楽しめた」「時間的にも適切だった」など、好意的な意見が多く寄せられた。演劇を鑑賞した子どもたちの様子についても、「引き込まれていた」「集中していた」「反応があった」「目が輝いていた」など、演劇を楽しんでいる様子がうかがえる記述が多数見られた。また、保護者からは、「分かりやすいテーマ」「ミスのない演技」「物語の展開の分かりやすさ」「演技を支える全体的なクオリティの高さ」「子どもの反応に応じた臨機応変な対応」など、多くの観点から高い評価が示された。

2024年度には、「表現班」の役割を物語の本質を捉えたイメージを膨らませ、それを表現として具現化することに重点を置く形へと見直した。その成果として、アンケートには「妖精のダンスが印象的だった」「言葉を使わずジェスチャーで表現する妖精に子どもたちが反応し、音楽と表現と一緒に楽しんでいた」といった記述が見られ、表現班のねらいが達成されたことが伺えた。一方で、「表現者の髪色が気になった」「歌の歌詞を配布していたため、子どもたちが一緒に歌えるような工夫があるとよかった」といった指摘も寄せられた。これらの意見を踏まえ、今後はより一層子どもの視点に立ち、表現を通して子どもたちの想像力を豊かに育むことができるような構成や演出を検討していく必要がある。

(3) 第一部・第二部共通の取り組み

第一部「子どものひろば」と第二部「まみむめめじろ」に共通する取り組みとして、定例リーダー会を開催した。リーダー会は2023年3月末より開始し、2024年度末まで継続して実施された。開催回数は、第一部で全9回、第二部で全20回であり、各回90分の枠で行った。参加者は、各部の学生リーダーおよび担当教員2名で構成された。

第一部と第二部の内容には連続性があることから、リーダー会の途中からは両部のリーダーが合同で参加する形態とし、意見交換や情報共有を通して連携を図った。

リーダー会の主な目的は、活動の進捗状況の確認、課題や問題点の共有、今後の見通しの整理であった。定期的に会議を設けることで課題を早期に把握し、迅速に対応することが可能となり、活動全体の質の向上につながった。一方、2024年度は第二部のリーダー会が先行して進められたため、第一部との整合性を図る点において課題が生じた。従来のように第一部終了後に第二部を始動させるという枠組みにとらわれるのではなく、同一テーマのもとで第一部・第二部が同時並行で取り組む体制を構築することが、より一貫性のある行事運営につながることを改めて認識した。

6. リーダー学生のヒアリング調査結果

学科行事第一部・第二部の終了後、2024年度に導入された新たな運営体制に基づく活動の実態や、活動を通して得られた効果・意義、さらに浮かび上がった課題を明らかにすることを目的として、研究倫理審査の承認を受けたうえで、リーダー学生5名を対象に個別のヒアリング調査を実施した。

ヒアリングでは、以下の9項目について質問を行った。

- ①担当教員の積極的な関与について
- ②定例リーダー会の実施とその効果について
- ③記録の活用とその重要性について
- ④組織図の活用と運営への影響について
- ⑤新たな発想や取り組みの導入について
- ⑥計画に基づいた活動の見通しと進行管理について
- ⑦授業の空き時間の有効活用について
- ⑧物品管理における工夫と徹底について
- ⑨主体的な活動を楽しむことの意義について

ヒアリングの実施にあたっては、内容を正確に記録するため、事前にボイスレコーダーによる録音の同意を得た。その後、音声データを文字起こしし、KJ法を用いて分析を行った。その結果、以下に示すような傾向が明らかになった。

(1) 「担当教員の積極的な関与」について

2024年度以前の学科行事運営においては、学科行事担当教員がリーダー学生や有志学生とコミュニケーションを図りながら、第一部・第二部ともに作品の充実を目指した支援を行ってきた。2024年度には、担当教員が自らの担当範囲を明確に区分し、より積極的に関与することで学科行事の運営を進めるという新たな方針が導入された。その背景には、多くの科目履修や実習、資格取得に向けた学修活動に日々取り組む学生に対し、主体的かつ意欲的な課外活動を効果的に支援したいという教員の意図があ

る。単位化されていない正規科目外の活動に積極的に関わることで、広い人間関係の構築や、協力・協調・調和といった保育者に求められる資質を育成する学びの場として、学科行事は重要な意義をもつものと位置づけられている。このような活動をより意義深く、かつ効果的に進行させるため、2024年度は担当教員2名が参加する定例リーダー会を設け、対面で活動内容を把握・共有する体制を整えた。リーダー会での議論内容については、担当教員が記録を取り、時系列で整理したうえで全学科行事担当教員と共有するとともに、学科会議において活動状況の報告を行い、教員間での共通理解を図るよう努めた。

リーダー学生からは、こうした教員の積極的な関与に対して、「有意義であった」とする評価が多く寄せられた。具体的には、「経費計上の内容が明確になったこと」「外部との連携が円滑に進んだこと」「リーダーとしての役割が明確になったこと」「担当教員が各班の状況を把握していたことで、提案されたアイデアを実践に活かすことができたこと」などが、その効果として挙げられた。一方で、課題も明らかとなった。第一部と第二部のリーダー会の開始時期に差があったため、当初は両部のリーダー間で十分な共通認識が形成されにくい状況が見られた。このことから、同一テーマのもとで構成されている第一部・第二部においては、リーダー会を合同で開催し、早期から共通理解を深めていくことが今後の課題として示された。また、担当教員はリーダー会で共有された情報を他の教員にも積極的に伝達していたものの、教員間で認識の違いが生じる場面もあった。これにより、行事担当教員同士が目指す方向性や支援の在り方について、より具体的かつ詳細なレベルで共通認識を図る必要性が明確となった。

さらに、教員の積極的な関与により、学生側にリーダー会への依存傾向が生じ、日常的な活動の進行が停滞する場面があったことも課題として挙げられる。リーダー会は、日々の主体的な活動を振り返り、課題解決や次の展開への示唆を得る場であるという本来の意義を学生と教員が改めて共有する必要がある。学修活動と並行して課外活動に取り組む学生にとっては、課外活動の時間を計画的に確保することが重要であり、リーダー会の時間内で作業を進めることは必ずしも効率的とはいえない。そのため、年度初めの段階で年間の活動計画と時間配分の見通しをより一層明確に立てることが、今後の重要な課題であると考えられる。

(2) 「定例リーダー会の実施とその効果」及び「記録の活用とその重要性」について

2024年度のリーダー会は、第一部と第二部で実施回数が異なっていたことから、情報共有が十分に機能せず、課題が残る結果となった。しかしながら、定例リーダー会を開催したことにより、各部の活動の進捗状況を共有し、次の活動に向けた見通しを立てることができた点において、一定の効果があつたと評価できる。その一方で、リーダー会が授業と重なり参加できない学生が生じた場合、出席したリーダーがメモや

文章によって情報共有を行っていたものの、文字記録のみでは内容を十分に把握することが難しいという課題が明らかとなった。特に、第一部と第二部が同時並行で活動している時期には、どちらの部に関する内容であるのかが不明確となり、その後の活動に支障をきたす場面も見られた。また、ヒアリング調査においては、リーダー学生から臨時リーダー会の必要性が提案された。担当教員が臨時会に参加することは物理的に困難な場合もあることから、リーダーのみで実施する臨時リーダー会を開催することは、今後の有効な対応策の一つであると考えられる。

さらに、正確かつ分かりやすい文字記録を作成するための方法を学ぶことも重要な課題として挙げられる。本年度の結果からは、学生による主体的な記録のみでは、情報が十分に伝達されなかったことが明らかとなった。これを踏まえ、記録用の統一フォーマットを作成し、記入例を提示することが一つの改善策として考えられる。ワード文書による記述に加え、エクセルを用いた表形式での整理や画像の添付など、視覚的に分かりやすい形で各部の活動を時系列に記録していくことで、次年度への引き継ぎ資料としての活用も期待できる。

なお、2023年度には Padlet を用いた情報共有を試み、2024年度には Instagram を活用して情報発信やコミュニケーションの活性化を図ったが、Instagram の活用については十分な成果を得ることができなかった。現在は多様なコミュニケーションツールが存在していることから、今後は、情報を漏れなく、かつ分かりやすい形で関係者全員に届けることができる手段を検討し、活動の円滑化と質の向上につなげていく必要がある。

(3) 「新たな発想や取り組みの導入」と「組織図」について

2024年度において、第一部・第二部ともに「組織図」を作成したことは、新たな発想に基づく画期的な取り組みの一つであった。組織図を作成したことで、各リーダーの役割や管轄範囲、担当教員への相談体制が明確となり、活動を円滑に進めるための基盤が整えられた。また、学科行事担当教員がこの組織図を学科内の全教員に共有したことにより、学科全体として行事の運営体制への理解が深まった。これにより、クラス担任やゼミナール担当教員が各学生の参加状況を把握することが可能となり、学科全教員が行事を見守る体制が醸成された。その結果、学生が安心して学科行事に取り組める環境づくりにもつながったと考えられる。

一方で、組織図の実際の活用はリーダー学生と担当教員に限定され、全学生への周知には至らなかった。そのため、組織図を全学年に向けて公開していれば、学生一人ひとりが行事への関心を高め、班内のみならず班を超えた交流の促進につながった可能性がある。また、担当教員への相談やコミュニケーションの機会が広がり、活動への主体的な関与を促す効果も期待できたと考えられる。今後は、組織図を単なる運営資料として位置づけるのではなく、学生が多様な人と関わるきっかけを得るためのツ

ールとして、より積極的に活用していくことが課題である。

(4) 「授業の空き時間を有効活用」と「物品管理を徹底・工夫」について

学科行事は正規の授業科目ではないため、活動は主に5時間目終了後（18時20分以降）に行われてきた。第一部（10月中旬開催）に向けた準備は9月末から、第二部（12月中旬開催）に向けた準備は11月上旬から、それぞれ開催前日まで続き、学生有志が大学の閉門時間である22時まで活動に取り組む様子が見られた。これらの状況から、学生の主体的かつ意欲的な学びの姿勢が伺える。一方で、1か月以上にわたり夜遅くまで活動を継続することは、学業への影響のみならず、生活リズムの乱れや体調不良を招くおそれがあり課題として認識されていた。こうした状況を踏まえ、2024年度は授業の空き時間（空きコマ）を有効に活用し、放課後の活動時間を削減する取り組みを行った。担当教員が各学年の空きコマ状況を一覧表にまとめて提示し、それを基にリーダー学生が有志メンバーへ情報共有を行った。空き時間に制作活動を行うにあたっては、活動場所の確保、制作内容の事前共有、使用物品の管理、安全面に配慮したルールづくりが不可欠である。そのため、総副リーダーは各班のリーダーに対し、班ごとの活動スケジュールを共有するよう依頼し、円滑な活動運営を図った。

物品管理については、「借用書」の記入を徹底し、使用物品の数量や返却の有無を記録する体制を整えた。しかし、その過程で「キリ」の紛失が判明した。調査の結果、当該物品は学科行事で使用されたものではなく、別の授業科目で使用された後に元の場所へ戻されていなかったことが明らかとなった。この事例を通して、学科行事で使用する物品と、授業科目で使用する物品とを明確に区別して管理する必要性が再認識された。特に、安全確保の観点からも、確実かつ責任の所在が明確な物品管理体制の重要性が示された。なお、2024年度は活動が進行中であったため、学科行事専用の物品管理予算を新たに確保することは困難であった。そのため、引き続き借用書を用いた管理を徹底する対応を行った。学科行事は年間を通して継続的に実施されるものであることから、今後は学科行事専用の物品管理体制を整備し、計画的かつ安全に運営できる仕組みを構築することが重要な課題であると考えられる。

(5) 「主体的な活動を楽しむことの意義」について

2024年度最初のリーダー会において、教員から「学科行事の魅力とは何か」という問いが投げかけられた際、リーダー学生は「学生自身が学科行事を楽しむこと」とであると答えていた。その後、学科行事終了後に改めて「楽しむ」という姿勢について振り返りを行ったところ、リーダー学生は、主体的に活動へ取り組んだことによって得られた達成感を強く実感していることが明らかとなった。一方で、活動を「楽しむ」ためには、単に意欲的に参加するだけでなく、行事全体の流れや目的を正確に把握し、状況に応じて臨機応変に対応する力が必要であること、さらに、参加者全員が前向きな

気持ちで活動できるよう配慮する姿勢が求められることも理解していた。特にリーダー学生は、下級生との積極的なコミュニケーションを図ることが、後輩の活動意欲を高める重要な要素であると捉えており、自らが先輩として学年の枠を越えた関係性を築いていくことの意義を強く認識していた。こうした関わりは、学科行事の楽しさや魅力を後輩へ伝え、次年度以降へと継承していく上で重要な役割を果たすものである。

以上のことから、主体的に活動を楽しむ姿勢は、リーダー学生自身の成長のみならず、学科行事全体の活性化や持続的な運営を支える基盤となる重要な要素であり、今後の行事運営においても大切にしていけるべき価値であるといえる。

7. まとめ

本稿では、本学科開設以来 21 年間にわたり継続して実施されてきた「子ども学科特別行事」（第一部・第二部）について、2024 年度に導入された新たな運営体制を概観し、リーダーとして活動した学生 5 名へのヒアリング調査をもとに、具体的な取り組みの実態とその効果・意義、ならびに今後の課題について考察した。

学科行事は、年度開始前から約 1 年間にわたって継続される長期的な活動であり、正規科目外でありながら学生有志によって運営されている。しかし、このような自主的活動が 20 年以上にわたり継承され、本学科の魅力の一つとして広く認知されてきた背景には、学生自身が学科行事を「楽しい学び」として実感できていることが大きく関係している。そのことは、授業後から大学閉門の 22 時までの活動に取り組む学生の姿からも明らかである。一方で、保育者養成におけるカリキュラムの変化¹や学修時間の増加、大学外でのアルバイト等を含む生活スタイルの変化により、学生が課外活動に自発的に参加することが年々難しくなっている現状もある。保育者として求められる力²には、子ども理解や専門性の向上に加え、社会の変化に柔軟に対応する実践力、他者と協働するための柔軟性や協調性が含まれる。学科行事は、学年間の枠を越えて共通の目標に向かい、知識や技術を活かしながら協働し、達成感を共有する体験的な学びの場であり、これらの資質を育成する上で極めて有効な機会である。

2024 年度のリーダー学生へのヒアリングからは、こうした主体的・意欲的な学びを支えるためには、教員の「積極的な関与」と「共に活動する同志としての関わり」が不可欠であることが明らかとなった。教員が積極的に関与することで、リーダーとしての役割が明確になり、経費管理や外部連携も円滑に進められた。また、新たに導入された組織図の作成により、学生は組織全体を俯瞰しながら活動を進める力を育むことができた。さらに、「子どもの絵画展」の実施を通して、文書作成や電話対応など、社会との関わりを体験的に学ぶ機会ともなった。

活動の主体はあくまで学生であることを前提としつつ、その主体性を引き出すために、教員が適切な助言や提案を行い、学生自身が「面白い」「楽しい」と感じながら活動できるよう導くことが、教員に求められる重要な役割である。そのためには、学生

と教員が「同志」として信頼関係を築く姿勢が不可欠であり、教員自身が意欲的な態度を具体的に示すことが求められる。また、学業中心の大学生活の中で学科行事に取り組みやすい環境を整えるといった、物理的・制度的な支援も重要である。年間を通じた計画的な見通しを立てつつ、状況に応じて柔軟に対応する力を育てていくことが必要である。

2024年度の具体的な取り組みとして、第一部「子どものひろば」では、出展団体募集から当日運営までの流れを各班リーダーに共有し、組織図を用いて活動のつながりや関係性の理解を促した。第二部「まみむめめじろ」では、班募集の際に活動の魅力を視覚的・言語的に可視化して伝えるとともに、授業の空き時間を活用することで放課後活動の負担軽減を図った。また、誰もが安心して参加・制作できるよう、物品管理の徹底や安全面への配慮を行った。これらの工夫により、有志学生が安心して心地よく参加し、楽しさを実感しながら活動に取り組むことが可能となった。こうした取り組みは、20年間にわたり先輩・後輩のつながりの中で培われてきた「伝統」を基盤としている。しかし、学科行事を今後も質の高い学びの場として継続していくためには、時代背景や学生の実態に応じて運営方針を柔軟に見直すとともに、学生の主体性を引き出す工夫や、活動の過程や思いを可視化する手立てを教員が積極的に示していく必要がある。

ヒアリング調査を通して明らかになったのは、学生が学科行事を教科目の枠を超えた「保育者になるための学び」として捉え、主体的に取り組んでいるという点である。今後は学科行事を、保育者養成に資する実践的な学びの場としてさらに発展させていくためには、リーダー学生だけでなく、有志団体や個々の参加学生といった多様な立場からの検証を重ね、行事を通じた学びの意義をより多角的に探究していくことが課題である。

引用文献・註

¹ 保育士養成課程の改定が2019年度に行われ、現在は新課程のもとでカリキュラムが遂行されている。見直しの具体的な方向性としては、①乳児保育の充実、②養護の視点を踏まえた実践力の向上、③子どもの育ちや家庭への支援の充実、④社会的養護や障害児保育の充実、⑤保育者としての資質・専門性の向上などが盛り込まれた。

保育士養成課程検討会、2017、「保育士養成課程の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～」

² 保育所保育指針では、保育士の専門性として、子どもの発達に関する専門知識と技術、子どもの発達を支える関係性の構築、保護者への相談援助、保育環境を構成する力など多様な観点から専門性を示している。

木村美幸編、2018、『保育所保育指針＜平成29年告示＞』、フレーベル館

参考資料

子ども学科学科特別行事委員編、2025、「2024年度『子ども学科学科特別行事』報告書
—オリジナリティーあふれる保育者養成の魅力と展望—」、目白大学人間学部
子ども学科